

海軍

北海道物語

長崎県 一瀬 千萬太

先日、テレビのチャンネルを切り替えた時、そこに小樽の街が映し出され、しかもそこにK亭が映されていたのである。小樽の断片的な映像は時々見かけていたが、K亭のみならずその周辺さえ見かけたことがなかった。目は吸い付けられてしまった。

K亭は当時軍指定の専用料亭であり、専用宿泊所であった。水交社にちなんで、水交寮の名で営業していた。

ここは終戦間近の昭和二十(一九四五)年五月の末

から約四十日間滞在し、大変お世話になった所である。広大な敷地と建物がかつての繁栄を物語っていた。小樽一番の料亭だということであった。大きかっただけに終戦時の混乱期を乗り切れたのだろうか、あるいは既に姿を消しているのではなからうか、復員後お礼の便りを出したが音沙汰がなく気になっていた。

思いは一気に当時に立ち返った。従軍中のことは身内にもあまり話したことがないので、自分史の一端の記録を兼ねて、いささか大げさではあるが、「北海道物語」と題し、当時の記事を書いてみようと思う。

昭和二十年四月の末、我が乗艦は北海道を目指して進んでいた。航海の途中、小生は高熱を発し寝込んでしまった。当時艦内ではパラチフスが多発していたの

で、舞鶴に立ち寄り患者を海軍病院に入院させることになり、小生も同じ疑いで二十人位の人達と一緒に入院した。

三週間ぐらいの入院中、度々の検査でも菌は発見されず、ついにはハンドドリルでごりごりと胸の真中に穴をあけ、骨髓を取りだし検査をした。それでも菌は発見されなかった。「困った、困った、病名は何にしようか」と軍医は頭をかしげながらも、退院となった。入院時、艦長から「小樽を基地にするので退院後は小樽に来るように」と言われていたので小樽へ向かった。

舞鶴駅から日本海沿いの汽車の旅であった。沿線のこととは記憶にないが、寝覚床と糸魚川を通った記憶がある。北陸線経由だったのである。各駅停車の鈍行で、しかも単線であった。空襲警報の停車や、軍用列車の通過待ち等、あちこちの駅で一時間から二時間待ちはざらだった。旅は今では考えられないが、四、五日もかかったようである。この間食事はどうしたのだろうか、食糧欠乏の中で駅弁があったのだろうか、全

然記憶にない。

舞鶴を出るころは汗ばむような気候であったが、北上するにつれて一枚一枚重ね着をし、函館ではすっかり冬姿になっていた。寒いはず、線路には一定の間隔ごとに集められた雪が、五月も末というのにうず高く積まれているのには驚いた。結構苦労しながらの旅で、小樽駅に降り立ったのは二十五日か二十六日の午後三時ごろだったと思う。

直ちに武官府を尋ね、艦の動静を聞いた。カムチャッカ方面に行ったのは分かっているが、その後の様子は不明とのこと。分かるまで逗留していなさいと紹介されたのがK亭だった。

七月に入ったある夜「艦長が呼んでおられます」と伝えにきた。行ってみると、主計長、女将が同席していた。夕方入港したそうである。無事を祝し近況を語り合った。艦長は女将に小生がお世話になったお礼を述べたあと、宿泊料の支払いを尋ねた。小生は一銭も払っていない。最近は煙草の現物借りまでしている旨

を伝えた。二カ月も給料は手にしていない、財布は空っぽであった。でもK亭にいる限り不安は感じなかった。艦長は、主計長に明日にでも精算するよう指示していたが、精算の金額などは一切知らされなかつたようである。

翌朝、艦長とともに戻った。主計長は昨夜のうちに帰っていた。懐かしい顔、顔、顔……。久しぶりに見るとすべて新鮮で、かつて気に止めなかつたものまで目新しく見えたりしたから不思議だ。積もる話が続いた。

小樽を出港後間もなく濃い霧に襲われ、幾日も幾日も太陽の出ない日が続き正しい位置が出せなかつた。時たま薄日に出合うと人工水平線の出る六分儀で天測するが、この機械そのものを使いこなすのがむずかしく、その上おぼろ日なのでどの程度信用していいのか分からない。止むなく禁止されていた電探をごく一瞬発射して山をつかみ、見当をつけて針路を変更し、やっとのことで目的の占守島の片岡湾へたどり着いたとのことであつた。

帰りには湾出港直後に敵潜水艦に捕まり、霧の向こうを浮上して追尾され、緊張、緊張の毎日であつたが、敷香湾でやつと離れたと苦勞の数々を披露した。

七月十四日、夕方から上陸し、二、三人でK亭へ行った。部屋は、滞在した部屋であつた。我が家に帰つたようなくつろいだ気でゆっくりしていると、艦長が呼んでいるというので部屋へ行った。司令と二人で来ていた。九時過ぎか十時ごろだつたらう、「今届けられた」と電報を手にしていた。内容は、「敵機動部隊が北上接近している。明日空襲の公算が大きい。各艦は商船数隻を連れ、山かげに避退するか、日本海へ遠く避退せよ」ということであつた。司令と艦長は相談のうえ前者を採ることにした。直ちに帰艦した。翌朝は、三時に総員起こし「対空戦闘昼戦に備え」の号令で行動開始したのは四時だつた。睡眠不足で、頭は重かつた。港外に出て投錨したのは六時ごろだつたらう。山陰を選んだのは、敵機が急降下、急上昇がしにくいからだつたらう。近くには商船もぼつぼつ集

まり投錨した。静けさの中、待ち時間が長く長く感じられた。空襲はないのではないかという気さえし始めた。

九時ごろだったろうか、爆音が遠くの方で聞こえ始めた。北海道には梅雨と空襲はないと思われていたが、梅雨はとにかくこの願いはもろくもくずれ始めたのである。間もなく爆音は頭上に来た。音からするとすごい数であったろう。この朝は雨こそ降っていないが雲が低く、手を伸ばせば届くのではなからうかという気がするくらい、垂れ込めていた。音はごうごうと密雲の上を北に進んで行った。静けさが戻った。何分ぐらいたったろうか、またごう音がして第二波が北に進んで行った。再び静かになった。目的地は北の方で、我々の方は免れたのではないかという気さえした。

半時間以上たつたろうか「飛行機数機、艦首方向、海面すれすれ、こちらに向かってくる」と見張員の緊張した声が響いた。見ると岬の陰から、低空で次から次と数多くの敵機が現れていた。「対空戦闘！ 撃ち

方始め！」艦長の号令でラッパが鳴り響く。対空砲は一斉に照準を定め、射撃態勢に入った。敵機は近づくのと徐々に高度を上げながら襲撃態勢に入ってきた。頭上を次々と飛来した。在泊の艦船からは一斉に応戦の銃砲が火を吹いた。敵味方から発射される曳光弾はあたたかも無数の流れ星が空も狭しと流れるがごとき観があった。

我が艦からも銃身を水で冷し冷しながら撃ちに撃ちまくった。敵の主たる攻撃目標は商船のようであった。時々ロケット弾が商船めがけて飛んでゆく。外れて防波堤に当たって爆発するのもあったが、中には真正面に当たり十畳敷ぐらいの大きな穴があいたのもあった。幸い水面上二、三メートルぐらいの所で浸水沈没は免れていた。普通、銃弾は弾道を描きながら飛んでゆくが、ロケット弾は後から火を吹きながら直線的にシューッと飛び、当たると青い火を発し爆発していた。全くすさまじいの一語に尽きる。

第二波、第三波の襲撃が終わり、敵機の姿が消えたのは十一時も過ぎていたのではなからうか。商船はあ

ちこちで甚大な被害を受けていたようであったが、我が艦の挙げた戦果は、撃墜一二機、撃破三機で、厚生省の公式記録には残っているそうである。乱戦の中ゆえ、未確認損害も相当与えていたろうと思っっている。

戦闘がおさまったあと、沖合の空で敵機三機が旋回しているのが見えた。半時間ぐらいたつても依然として飛んでいる。おそらく重要人物か、あるいは重要なものが浮いているのではなからうかと思われた。

捕獲に出動することになった。大砲を撃ちながら進んだ。このころは密雲も薄くなっていて、遠くのものも良く見えていた。編隊で飛んでいたのが、散開した。近付いたときの距離が三千メートルぐらい、遠のいたときは八千メートルぐらいだったようだ。ほぼ等間隔で円形を描きながら飛ぶようになった。我が方から撃ち出す砲弾はなかなか思うような所に行かない。何度も撃った。一発が遠距離地点を飛んでいる飛行機の至近距離で破裂した。悠々と飛んでいるように見えた敵機が慌てたように三機とも水平線の向こうに姿を消した。我々は追い払ったと思っっていた。

五分も経ったであろうか、水平線上に豆粒のようなものが見え、やがてだんだんと大きくなった。三機であった。おそらく、さきほどの引き返してきたのであろう。射程距離内に入ると襲撃態勢に展開した。一番機は左前方から射撃しながら艦首前方で舞い上がった。二番機は右斜めから突っ込み、艦の周囲に水玉坊主を立てながら舞い上がって行った。目の前を曳光弾が飛び散ると、敵も落ち着いた照準ができなからう。また、至近距離の飛行機の変動は速く我が方の照準も追い付けなかつたろう。ともに命中弾はなかつたようである。

その後、三番機が左真横から急降下して突っ込んできた。前後部の二十五ミリの機銃台は急転回しながら火を吹いた。前後部機銃の曳光弾は一方は敵機の上面すれすれ、一方は下端をかすめて飛んで行った。敵機は、このちよつとした間げきを縫うようにして、銃を発射しながら急降下してきた。艦橋にいた我々が、見下ろすような海面すれすれまで降下し、急上昇して行ったのである。艦橋の上に立ち、指揮していた砲術

長は、敵機が引つ掛かるのではないかと思わずしゃがみこんだという。操縦士の顔がはっきり見えたそうである。敵の操縦が上手だったのでもなからう、我が方が下手だったのでもなからう。瞬時の運、不運というべきか、このちよつとした間げきが大きな不幸をもたらした。敵弾は艦橋を中心に広く当たっていた。左舷機銃要員は、ほぼ全滅した。

艦橋の中も悲惨だった。窓から飛び込んだ銃弾は、直撃で当たったのもあり、中で破裂し鉄板に当たり、反転しぐるぐると回ったのに当たったのもあった。気が付くと即死者が二人倒れていた。二人とも左右の大望遠鏡の見張りについていた信号員であった。十七、八歳の幼な顔の残る少年水兵で、今でもはつきりと臉に浮かび、哀れで胸が痛むのである。小生は弾雨のなかで焼け火ばしを左頬にくっつけられたような激痛を感じ、思わず左手がいった。指先に固いものが当たり、指先でむしり取った。手のひらには血のりがべつとりとついてきた。小豆大の焼けた破片がこめか

みの血管に半分食い込んでいた。頬が半分飛ばされたと思ひこんだ。指先でつまんでいながら、あるとは思えなかったのである。

艦長は取り舵いっばいを命令し、急旋回、全速力で港に帰ることにした。その後敵の銃撃はなかったが、ただ一機追跡してきて小型爆弾を落した。爆弾はそれ、近くに大きな水柱を立てたがこれによる被害はなかった。機関室では、甲板での状況は分かっていたかったらしいが、大きな衝撃を感じ、何事かと機関長が顔を出したそうである。しばらく走っているうち艦長がぐったりとなり「前任将校代われ」と前任将校に指揮を任せた。

小生は艦橋で前方を見つめていたが、袖口からポタポタと血が垂れているのに気付いた。やがて右手の内側で痛いような、痒いような、しびれるような形容し難い痛みに襲われた。腕を上げて目駄目、下げて目駄目、もたせ掛けても駄目、全く手のほどこしようがなく、苦痛を堪えるだけが唯一の方法であった。

このとき半長靴を履いていたが、靴の中がぬるぬる

としてあちこちで痛みを感じてきた。両足とも弾にやられてるのが分かった。接岸直後指揮していた先任将校が「俺もやられた」と言った。左手がだらりとしている。弾が左腕を貫通し神経が切れていたのである。陸上部隊の応援を得て、戦死者、負傷者の応急処置を施すのにてんてこ舞いであった。小生はあちこちに弾は受けていたが、急所を外れていたので、気は確かであった。

やや落ち着いたころ弾火薬庫の鍵がないのに気付いた。一瞬茫然となった。鍵は小さな革靴に入れたのを小生が肩に掛けて持っていたのである。もしやと思っで見ると艦橋の真中に落ちていた。ほっとした。革の紐が切れていた。弾が胸をかすめて当たったのである。安心するとまた傷が痛み出した。医務関係者は重傷者に手をとられていたので、応急処置を主計長がしてくれた。主計長は西郷大尉であった。明治の元勲西郷従道の孫である。戦闘中艦橋に加勢に来ていて、前歯を二、三本、中程から折り、痛い痛いと言いながら手当てをしてくれた。階級は一つ違っていたが、同年

で気が合っていたので、親しくしていた。

最近になり名簿が整い、ようやく住所が分かった。一昨年十一月初め上京した折、電話をした。ご夫人が電話口に出られ、三日前に他界されたとのことであった。生前よりよく海軍時代の話をしておられ、意識不明になってからも、うわ言で「敵が敵が……」と言われたそうである。痛ましかった。生前一目でも会えなかったことが悔やまれ、しばらくは暗い気持ちに落ちこんでしまった。

小樽には、海軍では診療所しがなく、収容能力がないため、陸軍病院に入院することになった。小生も軍医長から「艦内での治療は無理だから一緒に行けよ」と言われ最後の便で病院に運ばれた。病院は街外れの小高い岡の上にあった。大きい病院であった。規模、ただずまい、ともに久原の海軍病院に似通っていた。着いたのは四時過ぎではなかったではなかったろうか。着いてみると、一同雨天体操場に枕を並べて寝かされた。準士官以上六、七人、下士官、兵二十数人

だったろう。小生は比較的元気で最後に診察のため寝た。診察後それぞれ病室へ連れて行かれたが、小生はいったん寝たあとは、もう一人立ちができず背負われて病室へ運ばれた。

このときの公式記録は、船体損傷、戦死九人と書いてあるだけで負傷者のことにはふれてないようである。おそらく終戦間近だったことと、病院が陸軍病院で連絡がうまくゆかなかったためではなからうかと思っている。

艦長は、脇腹に二発直撃を受けたのが、背中をぐるりと回って背骨で止まっていた。探傷のため二つの傷口を切りつないだところ、こぶしが入るぐらいの穴になったそうである。幸い内臓は傷ついていなかったため、割合元気であった。手術は、小生の退院後に行われたそうである。

先任将校は、小生が知る限りでは、左の指が曲がらず、手をつっていた。外に、水測士が艦橋の応援に来ていて、右の太ももに直撃を受けたのが、中で破裂し、レントゲンで見ると小豆をまき散らしたように

なっていた。手術のしようがなく、また筋肉で取り囲むからと、しばらくして退院した。行動にもあまり支障は無いように見えていたが、昭和二十五年ごろ若死にしている。鉛毒あたりの影響はなかったのだろうかとも思っている。

弾の傷には不思議なのがあるとは聞いていたが、負傷者の中には常識では考えられないような当たり方をしていた者もいた（水測士 片岡茂樹）。

入院中のある日、司令が見舞いに見えた。艦長はお詫びを述べられた。司令は「いや、自分はこちらで命令を出そうと思っていたところであった。意に添う行動であった」という意味の話をしてもらったの思い出している。

小生の負傷は大小合わせて十二カ所、摘出した数は復員後摘出を含め七カ所、うち一発は右肩甲骨のすぐ下に直角に当たっているようだが、今なお行方不明傷跡のみ残っている。幸い命にかかわるものはなかった。右腕の上膊部が後ろ側で肉を削りとられ、また前腕部では二本の骨の間を通り内側近くで止まってい

た。これが焼けた破片で、言いようのない痛みを起したのであろう。これで右指は動かさず左手で食事していた。軍医は神経が切れていなければ良いかと気遣っていたが、一週間目ぐらいいから徐々に動き出してほつとした。これは入院後間もなく摘出した。右足はもの内側を大きく削られていた。今も当時より小さくなつてはいるがなお、大きな傷跡が残っている。

また、俗に言う足の三里に一発、行動に支障はなからうということで、退院時には、そのままにし、復員後摘出した。左足には中指と人差指の付け根の間を通り、足裏で止まっていた。指につながる細い骨が砕けずに済んだことは幸せといふべきか。これも間もなく取り出した。

一番大変だったのは左足首の手術であった。朝涼しい間にということで手術が始まった。レントゲンでは、海面に島が浮いているような状態ではっきり写っている。「この辺ですか」と聞かれても「ここです」と教えることはできなかった。体の内部の神経の鈍さをはじめ知った。足首は血管や腱が集まっている所

であろう。軍医はこの辺りから始めましょうと言って慎重に切開していった。十一時半ごろになつても見付からなかった。

今日はここまでにしてまたやり直しましょうと言つた。小生は慌てた。「もう少し続けてもらえませんか」と頼んだ。軍医は「そうですか」と言つて続けた。五分と立たぬうちに、カチリとメスが当たつた。親指の爪ぐらゐの破片が取り出された。軍医は大きな息をつき、あとは君たちで処置するようにと、付き添つていた三人の見習医官たちに言つて引き揚げた。

見習医官たちは張り切つた様子で「今から整形だ」と言いながら傷口をいじり出した。このころから痛みを感じ出したので伝えると、すぐ縫合して手術が終つたが、このとき正午のサイレンが聞こえてきた。

執刀の軍医は応召の中尉で外科の医長だったようである。看護婦の説明によると応召前は小樽一の外科の名医と評判をとつていた人ということであった。おかげで、足首の機能に異常はない。翌々日だったろう。

四〇度近く発熱した。症状は風邪のようだったが、同室の他の人々は吸収熱ではないかと言っていた。二日間発汗が続き、食事もほとんど取れず衰弱した。

この衰弱がまだ十分回復せぬころ、新しい場艦長が病院に見えた。矢野艦長に挨拶の後、急に出動することになったので小生に艦に帰れないか、今艦を離れると、いづどこで捕まえることができるか分からないと言う。艦長が病院側と相談した結果、艦にも軍医もいることだし良からうということで退院し、両方から肩を支えられながら一緒に帰艦した。五時ごろであつたらう。戦死者、負傷者が多数出て、艦の機能はまひしていたが、人員の補充もつき、また船体の損傷も一応復旧したのであらう。出港準備で慌ただしくしていた。

小生は部屋に入り床についた。やがて機関の回る音がして出港したことが分かった。任務は北海道近海に二、三隻の敵潜水艦が出没しているとの報告がある。今商船が二隻南へ向かっているので、函館沖まで護衛せよということであらう。僚艦一隻とともに出動するように

なつたらしい。床の中では、ずつとうとうとしていた。夜中の何時ごろだったらうか、艦内が突然騒々しくなった。夢うつつのなかで聞いていた。はつと我に返った。

「配置につけ！」だ。「寝てはおれん」と起きて艦橋に向かった。探信儀室の脇を通っていると、開け放した部屋から「魚雷発射音」と艦橋へ報告しているのが聞こえた。やがて「魚雷探知」という声も聞こえた。手すりにすがるようにして上がるが、気ばかり焦り思うように進まない。刻々と状況を報告しているのが聞こえたが、中ほどまで進んだころ「方向が変わっています」と言うのが聞こえた。方向が変わるといふのは魚雷が当たらないということで、ほつとした。もうすぐ艦橋にたどり着くというとき、岸の方で大きな爆発音が二度続いて起こった。

艦橋に着いてみると、海面は明るく光り輝いていた。魚雷が一番艦との間を一発、続いて一発と、白泡の帯を引きながら猛烈な勢いで突き進んで行くのはつきり見えたという。艦長は直ちに攻撃を考えたそ

うだが、任務は商船を無事送り届けることにある。まだ商船には追いついていない。打電して、攻撃は他の部隊に任せ、あとを追った。ベッドに戻り寝たため商船のその後の様子は知らないが、無事送り届けたとのことであった。大湊に入った。大湊には工廠があり、小樽でできない修理をここですることになった。

このころ足首の傷が化膿しだした。軍医長は、縫った糸を取り除くと言った。不安になり「このまま何とかならないか」と尋ねたら「その方が勝負は早い。俺の言う通りせんと後は知らんぞ」と言う「まな板の鯉」不承不承同意した。糸を切りとった。赤子の口ほどの大きさで、ぱっくりと傷口があいた。結果的にはこの方が良かった。化膿もせず肉の盛り上がりは思ったより早かったようだった。でもかさぶたは、できては取れ、できては取れで、何年も続いた。一生これが続くのではなからうかと思っただけである。

修理のため、港の一番奥にあった工廠近くの岸壁に

横付けした。一週間か十日ぐらい在泊したろうか。再び敵機動部隊が近付き空襲の危険にさらされそうになった。

明日は危ないという日、翌早朝に岸壁を離れ、港外に錨を入れた。敵が飛来し戦闘が始まったのは十一時頃だったろうか。在泊の艦船もたくさんいたので双方入れ乱れての戦いであった。このときは、大きい被害はなかったようであった。戦闘のピークが過ぎてから、沖の方で旋回しているのがいた。あとでは俗に下駄履きと言っていた水上機も旋回に加わりやがて着水した。各所から多数の砲弾が飛んだ。近くに水柱が上がっていた。飛行機は、滑走し飛び立とうとしていたが、飛び立てなかった。二度三度試みたが、ついに飛び立てず、旋回していた飛行機も姿を消した。

だいぶ時間がたってから「見張りの報告によれば、搭乗員二人が浮舟に乗り陸地に向かってる。捕虜に出動せよ」と、司令部から命令が届いた。「先日手痛い目に合わされたばかり、空襲警報のさ中、のこのこ出掛けられるもんか」と、冗談半分、本音半分で、す

ぐには動かなかつた。司令部から尋問艦が来た。髭を生やした大尉だった。このころは、敵機の気配はなかつた。尋問官を乗せ出動した。現場には搭乗員、浮舟ともに無く、飛行機のみ浮いていた。引いて帰るところにし、作業員二、三人を泳がせ、ロープでくくり引っ張りだした。ロープが切れた。再びくくりだした。

その時、ラジオが大畑の飛行場が空襲を受けていることを伝えた。大畑は目睫の間である。すぐ大湊にくるのは間違いない。作業員を急ぎ引き上げ、元の位置に急行した。元の所には数隻の商船が集まり投錨していた。

艦長に、もつと奥に行くことを進言した。艦長は「そうしよう」と元の所を左手に見ながら奥に進んだ。滑るように入らう「水深を知らせ」の命令で海図を手に、陸上の物体を目標に位置を考え、図上の水深と照合し続けた。精いっぱいので「艦長ぎりぎりです」と知らせた。すかさず艦長は「いかり入れ」「後進徴速」を命令し、舟脚を止めた。直ちにコンパスで

方位を計り正確な位置を出すと、ほぼ頭の中の位置と合っていた。投錨したとき、敵機は頭上に迫っていた。戦闘が始まった。我が艦にも二、三機急降下してきたが、弾はいずれも外れて、二、三十メートル離れた海面に水煙りを立てて飛び去った。

大部分の飛行機は商船目がけて、集中攻撃をした。元いた場所では猛烈な襲撃に遇っていた。もし元の位置に投錨していたら再び大きな被害を受けたかもしれない。このときも、被害はなかつた。ただ投下用爆雷を後部甲板に出してあったが、これに一発弾があたり穴があいていた。当たり所が良かったのか、あるいは爆雷は水が入らないと爆発しないようになっていたのか、その辺はよく分からなかつたが、もし爆発していたら大変な事になっていたらう。

夕方、再び飛行機を引っ張りに行った。ロープをかけ引こうとしたとき「飛行機一機、艦首方向、こちらに向かってくる」と見張りの声が出た。機関銃を向けたい。ややして「パンクしています」と次の報告。「バ

シクぐらいにはだまされるな」射撃態勢をとり続けた。「目の丸が見えます」との報告で、やっと緊張が解けた。敵機が飛んで来る時間ではなかったので、おかしいと思いつながら向かってくる飛行機には警戒せねばならなかった。不意の出来事で、作業員を引き上げる余裕がなく、作業員は飛行機にしがみついていた。

飛行機は工廠の側の岸壁まで曳航し、引き渡したあと、港外に出て錨を下ろした。敵機は、翌朝また、大畑飛行場を爆撃したあと、再び大湊へ来た。少数機であった。目標はどこにあったか分からないが、水上機を見付け腹が立ったのか、その辺を集中的に攻撃したあと、引き揚げた。

大湊を出発し、稚内へ向かった。北洋作戦に参加するためであった。途中、留萌の町が見えた。町いっぱい煙が立ち昇っていた。空襲を受けた直後ではないかとさえ思えた。聞いてみると昆布を焼いている煙だという。何のため焼くのか今なお分からないが、珍しい光景であった。

稚内へ着いたのは、七日か八日ごろであったろう。

十日に千島に向け出発の予定であったが、商船が集まらず順延、順延で港内に停泊していた。沖合には日露戦争時代の巡洋艦「常盤」と大型商船一隻が機雷敷設艦に改造され、停泊していた。外に駆逐艦が一隻いた。これも旧型駆逐艦「松島」だということであった。宗谷海峡への機雷敷設のためだったらしい。

十二、三日あたりだったと思うが、空襲があった。沖合の「常盤」などが目標だったらしく我々の方には来なかった。敷設艦からは空襲の合間、合間におびたらしい機雷を流し始めた。北の方へ向かって流れていた。遠くへ流れて行ったものから徐々に沈んでいくようであった。おそらく爆発防止のためだったろう。

十四日だったと思う。作戦打ち合わせのため、各艦長は司令の元へ召集された。帰って来た艦長の話では作戦の打ち合わせは何もなかった。明日また行くと言っていた。何かおかしいぞとも言っていた。翌日、艦長は再び司令の所に行き、各艦長と一緒に、玉音を

聞いた旨発表した。

でも我々の行動は終わったのではなかった。翌々日ぐらいいったろう。樺太の邦人引揚げ輸送を命じられた。一回目は大泊へ行った。着いたときには、先に輸送艦が到着していて、収容を終え出発するところであつた。棧橋には誰一人人影がなかつたので、そのまま引き返したと思う。

更に二日後ぐらいいったろう。今度は商船を一隻連れて、樺太南部の本斗に行くことになった。ソ連艦と出合う危険があつた。出合つてもこちらからは手を出さずな、攻撃された場合のみ攻撃せよとのことで、不安はいっぱいだった。

出港直後より濃霧に襲われ、商船とは霧笛を発して、お互いの所在を確認しながら進んだ。樺太近海に達してからは、ソ連艦を警戒して使用を間遠くした。そのうち連絡が途絶えた。我々ではできる限り速度を落した、それでも速度が違うのでだんだん離れたのであろう。相手は老練な船長だから大丈夫だろうというこゝとで、独航して進んだ。どの辺を走っているのか全然

見当がつかない。

夜中の三時ごろ、艦長が「この辺でよかろう。岸の方に向けてみよう」と九〇度変針し、岸の方へ向かつた。岸までの距離も全然見当がつかない。このとき「測深儀いれます」と下士官が言つてきた。了解した。そしてその機転に感心した。優秀な下士官で頼りにしてきた一人であつた。ものの二、三十分も走つたらうか、艦長はこの辺でよかろうと速力を落としながら用心して進んだ。測深記録を見ていた下士官が、急に浅くなりましたと言つてきた。艦長に伝えると決断は早かつた。直ちに「いかり入れ」の号令。行き足が止まつた。

その後は部屋に入り、寝に就いた。翌朝八時ごろ目を覚ました。外は霧が立ちこめていた。朝食をとりまた寝込んだ。再び目を覚ましたのは十一時半ごろであつた。甲板に出てみた。まだ霧は濃くて何も見えな。寝あきた数人でしばらく甲板にいた。このとき、霧が少しずつ薄れ出した。霧の中から、ぽっかりと目

指す本斗の港が目の前に浮かんできた。ちょうど正午だった。入口の灯台まで三百か五百メートルぐらいだったろう。幸運の連続だった。まさに奇跡の一語に尽きる。

霧はますます晴れて遠くが見えるようになった。更に驚いたことには千か千五百メートルばかり北の方に商船がいかりを入れていた。皆驚いた。奇跡というだけではこのときの気持ちは言い尽くせない。奇跡以上の表現は何かないものだろうか。

陸上ではびっくりしたそうである。霧の中から急に軍艦が現れたものだから、ソ連艦と早合点しせっかく集まった人たちが小学校から山の中に逃げ込んだとの由、日本の船と分かって世話人たちが呼び集めるのに時間がかかった。我々は港には入ったがなかなか乗り込ませる段階にはゆかない。

ソ連軍が真岡まで南下し、なお南下を続けているとの情報も入った。真偽のほどは分からないながらも、真岡との距離は四十里くらいであったろう。軍用自動車での南下であれば三、四時間で着くだろう。ゆっく

りしてはいられないと、気は焦るが、我々手の打ちようがない。気が焦るなか、乗り込みが始まったのは四時ごろだったろうか。逃げ散る前は五百人ぐらい集まっていたらしいが、収容時は三百人ぐらいだったろうか。収容のとき、壮年男子は残れということだったらしい。

家族との別れにまた時間がかかり、出港するときはずでに薄暗く、狭い水路の港を出るには危険であった。総員、甲板で押し棒を持ち、石垣に触れるのを防ぐ態勢をとった。用心しながらゆっくり進み、ようやく港外に出た。帰りには、はぐれないよう商船を先にたてた。霧が出たり雨が降ったり、そのうえ速力が違うので追尾するのに苦労した。艦内だけに収容はできず、甲板にも多数乗っていた。雨のときは廊下にも一時退避したのである。稚内に着いたのは、翌日の午後二時ごろだったような気がする。この業務を終え、北海道を去り、舞鶴へ回航したのである。

〔編注〕

一瀬千萬太氏の手記は、第ⅩⅩ卷にも掲載されております。

【解説】

海防艦とは

海防艦は、旧式軍艦をもって日本沿岸の警備等の任務に当たっていたのであるが、昭和十七年、日本海軍は軍艦分類のなかで海防艦という艦種を新たに独立させた。この新海防艦は、従来の古い装甲巡洋艦ではなくフリゲート艦である。

海防艦は一七二隻が建造されて、一〇〇隻が終戦時に残った。このうち「鵜来」クラスは名前を残しているが、敵潜水艦を制圧する目的から、武装は次のようなものであった。

- 一〇年式四五口径
- 一二センチ高角砲
- 九六式二五ミリ機銃
- 八センチ対潜砲（迫撃砲）
- 一六基
- 一門
- 三門

九四式爆雷投射機（Y砲） 二門 または

三式爆雷投射機（K砲） 一六門

九五式円筒型爆雷（または流線型三式爆雷）

一二〇個

二二式水上見張用レーダー 一基

一三号対空見張用レーダー 一基

九三式水中聴音機 一基

九五式水中探信機（ソナー） 一基

その対潜能力は日本海軍随一のものであり、特に艦橋前に対潜兵器を積むアイデアは二十年後、スウェーデン海軍のポーフォス砲、イタリア海軍のランチャバスなどの先駆をなすものと見ても良い。

この対潜砲は三式迫撃砲と称するもので、昭和十八年正式兵器として採用された新兵器である。しかし、実質は陸軍の八・一センチ九七式曲射歩兵砲のことで、爆弾のように尾部に尾びれのついた砲弾を砲口から先込めする原始的な兵器であった。それでも発射速度が早く、野球のフライのような弾道を描いて落下するので、浅深度にいる潜水艦には、ある程度の効果が

あつたようである。

九五式爆雷は十九年末以降、たとえ機銃掃射を受けても誘爆を起こさない二式爆雷と代わり、防御が楽になつた。この二種の爆雷は、いずれも同一の大きさであるが、二式は九五式より七年も新しい昭和十七年に正式兵器として採用されたものである。

日本海軍は艦隊決戦主義を金科玉条として訓練して来た。従つて、商船を守ることはさほど重視していなかった。

ところが、第二次大戦が始まり、敵の潜水艦のために次々と商船が沈められると、慌てて護衛用海防艦のマスプロを開始したのである。そこで、海防艦は建造を急ぎ、たとえ個艦の性能は多少劣つても、早く、安く建造できることをモットーとした。建造費は駆逐艦の半分以下であつたようである。

これら海防艦は、海軍兵学校（江田島）でのプロの上官よりも、商船学校を卒業した予備士官によつて指揮されることが多かつた。

海防艦の任務は、地味な辛い仕事であり、駆逐艦の

ような格好良さは全く見当たらず、彼らの辛抱強い努力があつたからこそ、曲がりなりにも商船隊は船団を組むことができたのである。

海防艦は第一号海防艦より合計一一六艦であつた。

青年学校義務制と軍隊

海軍

滋賀県 武村正男

大正十（一九二一）年四月六日、私は姉二人の六人兄弟の長男として生まれ、昭和六（一九三一）年には十人の家族になりましたが、当時としては普通の家族人数であつた。

昭和三年四月、葉山村立葉山尋常高等小学校に入學。男女合わせて百余人で、紅白二組に分けられ、私は紅組で生徒数は五十二人であつた。全校生徒は八百人余りと言われ、毎年三月十日の陸軍記念日、五月二十七日の海軍記念日には朝礼後の一時間は、日露戦争